

第18回企画展

共催：

手と目でみる教材ライブラリー

2026年

5/20(水)



9/26(土)

和楽器の世界 琴線に触れる

日本点字図書館附属
池田輝子記念

ふれる
Tactus Museo
博物館

主催 日本点字図書館附属池田輝子記念 ふれる博物館

共催 手と目でみる教材ライブラリー

協力 武蔵野音楽大学楽器ミュージアム

一ツ目弁天会

公益財団法人 相川考古館

富田清邦

片岡亮太

新潟大学工学部 渡辺哲也

(本解説は、Wikipedia等を参考にしています)

和楽器

1. 弾きもの 箏

箏（こと・そう）は、奈良時代に中国から伝来した日本の伝統的な弦楽器で、桐の胴に13本の絃を張り、可動式の柱（じ）で音程を調節する和楽器である。八橋検校が現代の基礎を築き、親指・人差し指・中指に爪を付けて演奏する。一般的に「琴（きん）」と混同されるが、柱がない「琴」とは構造が異なる。

生田流・山田流などの流派も生まれ、生田流は上方（かみがた）（京都・大阪）で流行していた地歌（じうた）と結び付き、三味線との合奏を始めた。



【検校】

検校は、平安時代・鎌倉時代に置かれた荘官、社寺や荘園の監督役職名である。室町時代以降、盲官(盲人の役職)の最高位の名称と定着した。

江戸時代になると、国の座をまとめる総検校を最高位として京都に置き、江戸には関東の座の取り締まりをする総録検校を置いた。

盲官の検校は、専用の頭巾・衣類・杖などの所有が許された。盲官では、位階順に別当、勾当、座頭などがあつた。

日本の第54代天皇、仁明天皇(にんみょうてんのう)の子である人康(さねやす)親王が若くして失明し、そのため出家して山科(現在京都市山科区)に隠遁した。その時に人康親王が盲人を集め、琵琶や管絃、詩歌を教えた。人康親王の死後、側に仕えていた盲人に検校と勾当の2官が与えられた。これが検校と呼ばれる盲官の始まりといわれている。また、人康親王が坐って琵琶を弾いたという琵琶石は後に盲人達により琵琶法師の祖神として諸羽神社(もろはじんじゃ)に祭られている。検校もまた、剃髪し、正式な検校専用服(検校服)は僧服に近く、また実際に僧職となる者もいた。

江戸時代に入ると、幕府は盲人が当道座に属することを奨励し、当道組織が整備され、寺社奉行の管轄下ではあるが、かなり自治的な運営が行なわれた。時代の趨勢により、平曲はこの時代においては次第に下火になり、代わって三曲(さんきょく)つまり地歌・箏曲・胡弓が台頭する。

検校になるためには平曲・地歌三弦・箏曲等の演奏、作曲、あるいは鍼灸・按摩ができなければならなかったというが、江戸時代には当道座の表芸たる平曲は下火になり、代わって地歌三弦や箏曲、鍼灸が検校の実質的な職業となった。

磐城平藩(いわきたいらはん)の八橋検校、尾張藩の吉沢検校などのように、専属の音楽家として大名に数人扶持で召し抱えられる検校もいた。また鍼灸医として活躍したり、学者として名を馳せた検校もいる。

代表的な有名人は『六段の調べ』の八橋検校、近代箏曲の祖・宮城道雄、盲目の学者・塙保己一、そして大河ドラマで話題の鳥山検校があげられる。



【弹琴男子像(だんきんだんしぞう)】

群馬県伊勢崎市の公益財団法人相川考古館が所蔵する人物形象埴輪。国の重要文化財に指定されている。

男子が高い椅子に腰かけて膝の上に置いたコトを弾いている。なお、このコトは現在の13弦の箏とは異なる日本古来のもので、和琴(わごん)、大和琴/倭琴(やまごと)などと呼ばれるものである。長さ約1メートルで木製(檜や桐)の板、あるいは竹を割ったものに5絃を張り、男子が膝の上で奏したと考えられている。また、このコトは単なる楽器としてではなく、祖先の祭りや占いなどの宗教的用具として用いられた貴重なアイテムであったと考えられ、『古事記』にもその記事が見える。



大正琴

大正時代に、既存の二弦琴をもとに考案された楽器である。当時モダンで西洋文化の象徴とされたタイプライターのキーを取り入れ、半音階を容易に演奏できるようにしたことで、手軽に楽しめる楽器として普及した。

三味線

三味線(しゃみせん)は、日本の有棹弦楽器(ゆうそうげんがっき)。もっぱら弾(はじ)いて演奏される撥弦楽器(はつげんがっき)である。四角状の扁平な木製の胴の両面に猫や犬の革を張り、胴を貫通して伸びる棹に張られた弦を、通常、イチョウの葉の形をした撥(ばち)で弾き演奏する。

成立は15世紀から16世紀にかけてとされ、戦国時代の永禄年間(1558～1569)に琉球、現在の沖縄県から大阪の堺に伝来したもの。他の多くの和楽器と比べ「新しい楽器」である。基本的にはヘラ状の撥を用いるが、三味線音楽の種目により細部に差異がある。沖縄県や鹿児島県奄美群島では三線(さんしん)とも呼ぶ。

素材には高級品ではコウキ材(インド産)を用いるが、シタン、カリン材(東南アジア産)の棹もある。固く緻密で比重の高い木が良いとされる。

革は一般に琉球三線のニシキヘビの皮と異なり、猫の腹や犬の皮を使用していたが、高価な事と、動物愛護法の観点から現在は両方とも使用されなくなってきており、代替素材として羊皮(ひつじのかわ)や合成皮革に移り変わっている。

糸(弦)は三本で、絹製。絹糸は白色だが、ウコン粉で黄色に染色する。これは、江戸時代までの、絹糸を採取するカイコの繭が黄色であったことを反映したものと考えられている。



三線

沖縄県と鹿児島県奄美群島で用いられる。日本本土のものより小型でスケールも短く、インドネシアニシキヘビの皮と、黒檀製漆塗りの棹に特徴がある。撥も本土のものとは異なり、水牛の角で作られた爪や、竹を薄く削った細い棒状のもので弾く。

琵琶

琵琶(びわ)は、東アジアのリュート属弦楽器で、西アジア起源の楽器が中国を経て日本に伝わり、雅楽の「楽琵琶」や、盲目の僧侶が用いた「平家琵琶」「薩摩琵琶」「筑前琵琶」など、様々な流派に発展した。弦を撥(ばち)で弾いて音を出し、力強い音色で物語の語り物伴奏などに用いられ、正倉院にはインド経由の5弦琵琶が現存する。

構造:卵型に近い共鳴胴に長い棹(さお)がつき、糸倉(いとぐら:ヘッド)が後ろに曲がっているのが特徴(5弦のものは直)。高いフレット(柱)が特徴で、指で押さえて音程を変える。

奏法:撥(ばち)で弦をはじく撥弦(はつげん)楽器で、力強くリズムを刻む打楽器的要素も持つ。

音色: はじいた瞬間の力強さと残響の少なさから、和音よりもリズムを重視する。

弦の数:4弦が一般的だが、5弦のものも存在する。

琵琶の種類

楽琵琶:雅楽の合奏でリズム楽器として使用される。

盲僧琵琶(もうそうびわ): 盲目の僧侶(琵琶法師)が仏教の教えを広めるために用いた。

平家琵琶:平家物語の語りに使われ、語り物音楽のジャンルを確立。

薩摩琵琶:盲僧琵琶を改良し、男性的な力強い表現を特徴とする。

筑前琵琶:明治以降に発展し、女性にも人気。優美な語りや多様な演奏法を持つ。



百人一首画帖(模本) 蟬丸
(東京国立博物館所蔵)

胡弓

多くのものは3本の弦を持ち(4本のものもある)、ほぼ三味線を小型にした形をしている。素材も三味線とほぼ同じで、現在では棹に紅木(こうき)、紫檀(したん)、普及品には花梨(かりん)が使われ、胴は花梨で、皮は猫または犬、弦(糸)は絹製である。三味線と大きく異なるのは駒で、設置する位置も全く違うが、作りや材質も大きく異なっている。

音楽としては、胡弓楽、地歌、義太夫節、清楽(しんがく)などで用いられる。「三曲」のひとつであり、三曲合奏の構成楽器の一つ。また日本の民謡で、特に北陸から関西にかけて使用されるほか、各地の民俗芸能や一部の宗教において演奏される。特徴として、弾く弦を変えるために弓ではなく本体を回す。



【雅楽】

雅楽(ががく)は、1200年以上の歴史を持つ世界最古のオーケストラとも称される日本伝統の宮廷音楽。平安時代に完成し、主に管絃(合奏)、舞楽(舞と伴奏)、歌謡で構成され、皇室の儀式や神社仏閣の祭典で奏される。代表的な楽器には笙、箏、篳篥(ひちりき)、龍笛(りゅうてき)などがあり、その形式美はユネスコ無形文化遺産にも登録されている。

2. 吹きもの

尺八

竹の根元に近い部分を下端に用いた素朴な形状の楽器である。長さにはさまざまな種類があるが、「一尺八寸管(約55cm)」が最も一般的で、標準管とされ、名称の由来となっている。

【虚無僧 笠】

虚無僧(こむそう)とは、禅宗の一派である普化宗(ふけしゅう)の僧のこと。

古くは、「こもそう(薦僧)」ということが多く、もと坐臥(ざが)用のこもを腰に巻いていたところからという。虚無僧は「僧」と称していながら剃髪しない半僧半俗の存在である。尺八を吹き喜捨(きしゃ)を請いながら諸国を行脚修行した有髪の僧とされており、多く小袖に袈裟を掛け、深編笠をかぶり刀を帯した。はじめは普通の編笠をかぶり、白衣を着ていたが、江戸時代になると徳川幕府によって、托鉢の際には藍色または鼠色の無紋の服に、男帯を前に結び、腰に袋に入れた予備の尺八をつけるように規定された。首には袋を、背中には袈裟を掛け、頭には「天蓋」と呼ばれる深編笠をかぶり、足には5枚重ねの草履を履いている。



笙

伝説の鳥、鳳凰(ほうおう)が羽を立てた姿に見立てられ、「鳳笙(ほうしょう)」とも呼ばれる雅楽の楽器である。指孔を塞いだ管が鳴る仕組みで、複数の管を同時に鳴らして和音を奏でることができる。また、吹吸(すいきゅう:吸ったり吐いたり)どちらも同音が出るため、音が途切れることなく旋律を彩る役目を担っている。



篠笛

日本の木管楽器の一つで、篠竹(雌竹:めだけ)に歌口と指孔(ゆびあな)を開け、漆ないしは合成樹脂を管の内面に塗った簡素な構造の横笛である。

楽器として見た「篠笛」は横笛の一種であり、洋楽器のフルート属とよく似ている。音階や運指(うんし)などに違いはあるが、原理的には「フルート」の管を竹にして「キー装置」を取り去り、音孔(ぼとあな)の数を人間の指の数に合わせ、押さえやすい長さにしたものと考えられている。



高麗笛 (こまぶえ)

朝鮮半島から伝来した雅楽の横笛で、主に高麗楽や東遊(あずまあそび)で用いられる。竹製で6つの指孔を持ち、長さ約36~37cmと雅楽の横笛(龍笛、神楽笛)の中で最も短く細いため、鋭く澄んだ高音が出る。音の高さは龍笛より1全音高い。

按摩笛

流しであんまの営業をするときに使われた。笛は明和・天明ごろ(1764～1788)に吉原で始まり、続く寛政期に他所に広まった。

男笛と女笛がある。客は笛の音色の違いで男女を区別した。ところが、現在の時代劇では男あんまが女笛を吹いて登場している。これは、男笛が夜鳴きそばのチャルメラの音色にそっくりなので、やむなく女笛で代用しているのではないかとされている。(左・男笛 右・女笛)



3. 打ちもの

和太鼓

和太鼓(わだいこ)は、打楽器のひとつで、日本の伝統的な太鼓の総称。木でできた胴に皮を張り、それを振動させて音を出すものである。

古代から祭礼や神社仏閣における儀式等に使用され、芸能分野では田楽や猿楽、神楽や民俗芸能、さらに中世以降は雅楽や能楽、歌舞伎、念仏踊りなどの楽器として用いられてきた。桴(ばち)で叩くものを太鼓と呼び、手で叩くものは鼓(つづみ)と呼ばれる。

小鼓

両端に皮を張り、「調べ」と呼ばれる橙色の麻製のひもの握り具合や、鼓面の打ち方によって音色を使い分ける。丸みのある音色が特徴である。



【太鼓の構造】

代表的な和太鼓の構造は、くりぬき胴か、弧形(こけい)の側板を箍(たが)で締めた結桶(ゆいおけ)構造である。輪切りにした木材の内部をくり抜いて胴にする長胴太鼓の原木にはケヤキやクスノキなどの広葉樹を用いる。長胴太鼓には牝牛(めうし)の皮を用いることが多い。皮には基本的に数回の出産を経た牝牛が最良とされるが、大きなものでは、牡牛(おうし)の皮が利用されることもある。

長胴太鼓

(宮太鼓)

一木造り(いちぼくづくり)で原木を輪切りにして内部をくりぬいた胴の太鼓。皮は胴に鉾を用いて留められている(鉾打太鼓)ことが多い。鼓面に巴を描いたものもあり、同じ形式の太鼓は宋にあり、これが日本に伝来して江戸時代に普及した。太鼓演奏では中心的楽器となるほか、相撲のふれ太鼓、歌舞伎の下座音楽、祭囃子に用いる。



桶胴太鼓



縦に割られた板を寄せて円形にして胴をつくったもの。低音、音響也大。檜やサワラなどで胴が作られ、比較的軽いのが特徴である。紐締めのものが主流である。

木魚

中国から伝来したと推測される楽器である。主に禅宗や浄土宗などで、読経のリズムを整えるために用いられる。構造にスリット(割れ目)があることから、楽器分類ではスリットドラム的一种に位置づけられる。



磬子 (きんす)

中国から伝来したと推測される楽器である。読経の際に用いられ、低音で長い余韻に特徴がある。

金剛鈴

平安時代中国より伝来し、主に密教で使用される。高く澄んだ音色と長い余韻が特徴である。



神楽鈴

神道と結びつき、神楽で巫女が舞いながら鳴らすほか、神事や祈祷などにも用いられる。鈴には邪気を祓う効果があるとされ、三段の輪につけられた鈴は、下から七個、五個、三個で、縁起のいい数に因んでいる。



4.その他

チンドン太鼓

チンドン屋は、チンドン太鼓と呼ばれる楽器を『チンチン・ドンドン・チンドンドン』と鳴らすなどして人目を集め、その地域の商品や店舗などの宣伝を行う日本の請負広告業の一類型である。披露目屋・広目屋(ひろめや)・東西屋(とうざいや)と呼ぶ地域もある。またカラフルな衣装を纏う人のことをチンドン屋と呼ぶ地域もある。

鉦(当たり鉦):「チン」という高い音を鳴らす。

締め太鼓(小締め太鼓):「ドン」という響きを作る。

平太鼓: 低音を担当する。

チンドン屋の口上: 宣伝すべき内容を伝える役割として重視され親方が担うことが多い。飴売ほか物売を祖とすることに加え、昭和初期には活動写真館の弁士、芝居役者なども流入したため、様々なスタイルが混じり合っている。

化粧と衣装: 支度と呼ぶ。多くは白塗で、カツラを着けた和装、着帽での洋装いずれにしても華美な衣装を纏う。

寸劇: 路上で寸劇を演じることもあり、昭和30年代頃には、10人ほどでチャンバラの立ち回りをすることもあった。この他、成人の人形を前に抱え、背負われた子供を演じつつ人形を操作する「人形振り」など、独自の芸を持つ者もいる。



びんざさら

平安時代末にはすでに存在していたとされ、現在は主に民俗芸能で使われている楽器である。木片を連ねた構造で、木片の数は108・72・36などの種類があり、意味があるとされる。108は煩惱の数に由来するほか、四苦八苦にちなむ数($4 \times 9 = 36$ 、 $8 \times 9 = 72$ 、 $36 + 72 = 108$)とする解釈もある。これは、人生から「苦」を取り除きたいという願いが込められたものと考えられる。この楽器は72片のものである。



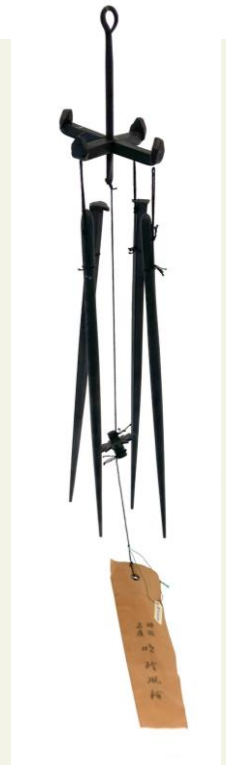
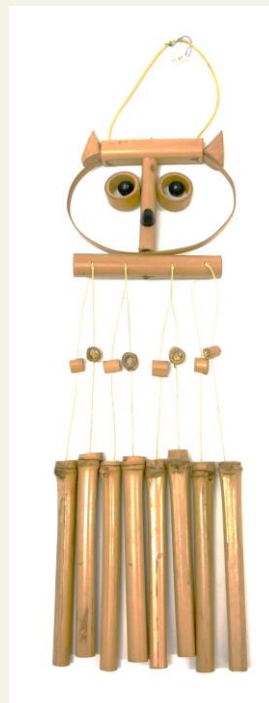
すりざさら

「棒ざさら」や単に「ささら」とも言われる。現在は、主に民俗芸能で用いられる。この楽器は越中五箇山(ごかやま)の「こきりこ」で用いられていたものである。



風鈴 (竹鈴・火箸)

冷房のなかった時代、人々は風鈴の音色によって涼を感じていた。そこには自然と共生する日本の音文化が表れている。素材の違いによって、さまざまな音色を楽しむことができる。



音具・郷土玩具

ガラガラ 2種

日本の伝統玩具の世界には、でんでん太鼓に代表されるように、音を奏でる「音玩具」が数多く受け継がれている。これらも音玩具の一種で、横に振って音を出す。



鳴子

本来は田畑の鳥を追い払うための道具であったが、現在は「よさこい鳴子踊り」などで用いられている。



鳥笛

鳥笛(とりぶえ)は鳥の鳴き声に似た音を出す笛の総称である。もとは狩猟で鳥を集めるために使われたもので、鳥寄せ笛とも呼ばれる。現代では鳥の形を模してつくり郷土玩具・土産物として売られていることが多い。

よく知られているものは竹製の鶯笛で、江戸時代にはすでに鳥寄せや飼育用の声慣らしとして用いられており、次第に子供の玩具としても普及するようになった。短く切った竹の端を指で押さえて開閉させながら吹くもので、鶯の形の飾りをつけたものも多い。会津若松などでは初音の笛と呼ばれ、各地で同様のものが売られている。梅の花の盛りに売られたもので春の季語としても扱われる。類似のものに雲雀笛、雉笛、梟笛といったものがある。

明治天皇のオルゴール



このオルゴールは、明治天皇御愛用の遺品で、明治天皇の皇后・昭憲皇太后(しょうけんこうたいごう)が明治36年に天皇に贈ったもの。天皇の御息女であられる東久邇聡子(ひがしくに としこ)夫人から日本点字図書館へ賜ったものである。昭和33年11月11日に東京ヘレン・ケラー協会講堂で開かれた本館の点訳奉仕の集いにご出席下さった夫人から「盲人の方々をお慰さめするため、お使い下さい」との言葉と共にいただいた。

曲目

1. 春雨
2. 春雨 変奏
3. ひとつとや (数え歌)
4. おんことこと
5. さくらさくら
6. かんかんのう

日本点字図書館附属池田輝子記念 ふれる博物館

開館日◎企画展開催時期の毎週水・金・土曜日

(年末年始・祝日休館 臨時休館有)

開館時間◎10時～16時

※10時、13時、15時の予約制です

東京都新宿区高田馬場2丁目3-14 アイ・ブライト2階

(1階は美容室 路上に誘導ブロック有)

電話 090-3247-7290(開館日のみ)

03-3209-0241本館代表

日本点字図書館附属
池田輝子記念

ふれる
Tactus Museo
博物館